

AI時代の異文化コミュニケーション

横浜国立大学教授 板垣 勝彦

コロナ禍も落ち着いて、今年は韓国と台湾を訪れる機会があった。台湾は初訪問だったが、さすが漢字文化圏、全く中国語を勉強していない私でも、看板や案内をみて何が書いてあるかくらいは意味を解することができた。この傾向、専門分野では特に顕著であり、一見すると難解な用語が散りばめられたレジュメや論文ほど、共通理解が可能なのである(それだけ法律用語など欧米概念の直訳なのだという証左でもあるが)。飛鳥や天平の昔、海を越えた留学生たちも、筆談を通じて徐々にコミュニケーションを深めていったのだろうと、先人たちの営為に思いを馳せたのだった。

片や韓国であるが、1970年の「漢字廃止宣言」以来、学校教育やメディアにおいて漢字の使用頻度は激減し、原則としてハングル表記に切り替わっているために、残念ながら看板や案内に何が書いてあるのか読み取ることができない。私の前後の世代までは学校教育で必修であったそうで、かろうじて漢字が通じるといった次第である。国内では漢字教育の復活を巡って激論が交わされているという。ベトナムは早々に漢字を廃止してしまった。国情はそれぞれであるとはいえ、寂しいものがある。

しかし、私が非・漢字文化圏で生を得た人間であったならば、成人してからこの複雑・難解な表意文字を習得する気には到底ならなかっただろう。やはり物心つくかつかないかの時期に学校で徹底的に叩き込まなければ、漢字の習得は困難である。東アジアの共通文字を習得させてくれた学校教育のカリキュラムに対し、あらためて感謝の念を抱いた晩秋の出来事であった。

それぞれの言語によって読み方が異なったとしても、同じ漢字が人名や土地に用いられていれば、ぐんと親近感が湧いてくる。親近感がある同士ならば、争う気も起きてこないというものである。世界情勢が緊迫して、それぞれの国でナショナリズムが勢いを増している現在、言語によるコミュニケーションを図ることができるか否かは、相互理解を深めるために不可欠な要素ではないだろうか。

韓国訪問の話に戻る。同行者から、スマートフォンの翻訳カメラ機能を使うと便利ですと教えられたので、アプリを入れて実際に試してみた。そうすると、あらふしぎ、商品に記載された文字にカメラを当てるだけで、「白菜のキムチ」、「葱のキムチ」、「大根のキムチ」などなど、商品名から原材料、製造工場、賞味期限、注意書きに至るまで、詳細に日本語へと自動翻訳してくれるではないか。AI技術もここまでできたかと吃驚した。

思えば、海外の研究者にメールしたり、論文を英文要約したりする場合にも、ウェブの翻訳機能の助けを借りることが多くなった。音声での自動翻訳ソフトの進歩も目覚ましいものがある。留学経験がなく、英単語の聴き取りさえ覚えぬ身としては、ありがたい限りである。技術的な対応はスペイン語やフランス語といった印欧系の言語から進むと思われるが、そう速くない将来には、需要の高い中国語、アラビア語、マレー語といった非印欧系の言語間においても、機械を通じたコミュニケーションは可能になるだろう。

自分がおそらく生きている間に上記技術が達成されるであろうことは、歓迎という以外にない。ただし、一抹の不安は残る。インターネットの普及で世界中の人々が直接交流できるようになったが、現実世界の紛争は言うに及ばず、SNSや掲示板などウェブ空間における言論の惨状には目を覆うものがある。直接話し合えば、世界中の人々ともきつとわかり合えるという期待が幻想に過ぎなかったことを嫌というほど思い知らされたこの20年間の経験を振り返れば、自動翻訳が発達しても(するほどに)異文化間の摩擦が消えることはなく、却って拡大の危険すら否定できない。

重要なのは、相手の話す内容をただ単になぞるだけでなく、相手の思考の文化的背景まで遡って理解することなのである。この点、言語の構造は、その話者の思考様式を少なからず規定する。近年はすっかりご無沙汰であるが、辞書と首っただけでドイツ語論文と格闘した駆け出しの頃、全ての文章を直訳しても何を言おうとしているのかわからず、途方に暮れた経験を思い出す。ドイツ人とは何とも複雑・難解な考え方をするものだと感心したものである。そのような悪戦苦闘を通じて、他文化の「ものの考え方」を学ぶことが、AI時代の言語学習の要諦となるのではないか。言語を学ぶことは、その話者が当該概念をどのような組み立てで理解し(ようにし)ているのかを知る経験である。自動翻訳が全盛の時代になっても、その意義は些かも揺らぐものではないだろう。